

活動状況報告（1月）

文化芸術コース 4期生 北浦 由花里

ワルシャワでの生活も3ヶ月が過ぎ、新しい年を迎えました。いよいよ冬も本番になってきました。「ポーランドと札幌の気候は似ている」と度々言われていますが、こちらの今年の冬は暖かく、過ごしやすい日々を送っています。諸外国と同様に、ポーランド国内の新型コロナウイルスの感染者が急増してきました。1月は、(下記のチラシの)大学の演奏会に出演する予定でしたが、共演者の感染により叶わなくなってしまいました。感染には日々気をつけておりますが、先日こちらで3回目のワクチン接種をしました。ありがたいことに予約もすぐ取れ、外国人に対しても無料でした。この接種により、EU共通のデジタルパスポートが発行され、今後様々な場面で使用可能になることと思います。

さて、12月に冬学期のピアノの実技試験が終わったので、今月からは修士課程修了に向けた準備を本格的に開始しました。大学院の卒業には、90分のピアノの実技試験、修士論文、口述試験の三つをパスする必要があります。今月からは、この実技試験の曲目を決め、練習を始めました。90分のプログラムは、全てポーランド人作曲家の作品を扱うことにしました。ショパン(1810年-1849年 ポーランド出身で、前期ロマン派音楽を代表する作曲家)の少し前の時代から、ポーランドの近・現代曲までの作曲家たちです。今現在は、楽譜を読み込んでいる途中ですが、自分自身でもいいプログラムになるのではないかと期待しています。今月のピアノのレッスンは、それらの曲をみていただいておりますが、主にテクニックの面のレッスンが多かったと思います。一つ一つの音を均等に弾いたり、大切な音を美しく歌い上げるための指使いを中心的に学びました。

また、試験曲の中に、現代の黒くて大きなグランドピアノとは全く異なる、「フォルテピアノ」(※18世紀-19世紀にかけて存在した初期のピアノのこと)で創作された作品があります。しかし、現代のピアノでこの作品を演奏するので、当然、作曲家の意図しない演奏や解釈が生まれてくるでしょう。今回のレッスンではその点を指摘され、モダンピアノで弾く場合の音の鳴らし方やアーティキュレーション(※音と音のつながりに様々な表情をつけること)を確認していただくことができました。ポーランドでは、この「フォルテピアノ」という楽器に対する教育や普及への努力がされています。留学中にこの楽器についても学び、触れ、機会を探し実際に演奏ができたらいいなと思っております。これから13曲程度の作品と向き合っていきますが、テクニックはもちろんですが、それぞれの時代背景やその当時使用されていた楽器と現代のピアノの違いを十分に考慮しながら、音楽の構成を練っていきたくと思います。また、1月には室内楽の試験もありました。かねてから勉強をしていた、ショパンの「序奏と華麗なポロネーズ Op. 3(Introduction et polonaise brillante C-Dur Op. 3)」をチェリストと共に演奏しました。さすがはショパン、ただの伴奏で終わるのではなく、華やかで技巧的な序奏とチャーミングなポロネーズを創り上げました。ショパンの室内楽曲を勉強するのは初めてだったので、「ショパンのピアノソロでは十分に表現ができるのに、室内楽になるとなぜ音楽が消えて無くなるの？」とレッスンでは度々指摘されていました。そこで、自分の演奏するパートの勉強はもちろんのこと、パートナーとの練習の中で、たくさん話し合いを行い、ショパンのこの作品についての理解を深めていきました。試験では、お互いの音をよく聴きながら、ショパンが残してくれたチェロとピアノの掛け合いを楽しみながら演奏することができたと思います。

上記の作品に加え、決して多くはないですが、ショパンが作曲した室内楽曲がいくつかありま

す。日本に帰国した際のレパトリーとなるよう、ショパンの生まれた地のこのワルシャワで学んでいきたいと思います。2月からは、いよいよ夏学期が始まります。きちんと修了できるよう頑張りますので、引き続き温かいご声援をお願い致します。

